

現代教育学部と教師教育 ——個人的視点から見た現代教育学科10年の歩み——

吉田 直子*

The Faculty of Contemporary Education and The Teacher Education: A ten-year history on the Department of Contemporary Education from a Personal Perspective

YOSHIDA Naoko

要 約

現代教育学科は、広く「次世代教育」についての知性と実践力を備えた人材の育成を目指して設置され、10年の節目を迎えた。現代教育学科がとくに力を注いできたのは学校教育の分野であり教師教育である。その変遷について、学科の教育目標と教職への指導体制、教員免許取得者数および教職就職者数の推移、卒業生のアンケート調査の結果、課外活動の意義、という観点から振り返り、教職就職者数の増加など一定の成果が見られたことを考察した。

今後の課題は、これまでの教職志望学生への指導体制や課外活動を、対外的な変化に即応させつつも原点に沿って推進していくこと、大学教育の古くて新しい柱である幅広い教養、豊かな知性や思考力を磨くことの重要性を、改めて学生に認識してもらうことなどである。

キーワード：実践力、教師教育、教職、課外活動、幅広い教養

1. はじめに

現代教育学部の1学科である現代教育学科は、広く「次世代教育」についての知性と実践力を備えた人材の育成を目指して設置され、10年の節目を迎えている。現代教育学科は、学校、地域、家庭等において子どもの教育に貢献する人材の育成を進めてきた。そのなかでとくに力を注いできたのは学校教育、教師教育の分野である。

そこで本稿では、現代教育学科が取り組んできた教師教育はどのような特徴を持ち、どのような方法で取り組み、成果をあげたといえるのかについて、教員免許取得者数や教職に就いた卒業生数の推移や

卒業生へのアンケートを通して振り返る。そしてこれから現代教育学科には何が求められるのかについて、所属教員としての経験と個人的視点から考察したい。

2. 現代教育学科の目指す教師像

中部大学は、「不言実行、あてになる人間」を育てるという建学の精神のもと、理系の私学としての実績を重ねて50年以上の歴史を持っている。現代教育学部は7番目の学部として、教育学の分野から建学の精神を具現化しようと2008年4月に創設された。児童教育学科（2017年度に現代教育学科に名称変更、以後現代教育学科と称する）はその1学科としてスタートした。

* 中部大学現代教育学部現代教育学科

現代教育学科の教育目標は、学生便覧にあるとおり、「次世代教育」の在り方についての深い知識と実践力および「人間的資質」を備えた人材を養成することである。すなわち「現代の教育」に関する学際的な基本的知識・技能を身につけ、積極的に課題解決に当たる能力を養成すること、また子どもに温かいまなざしと愛情をもち、子どもに関与することを生きがいとして、自らも学びつつ成長できる資質を養成することである。その教育課程は、学生の適性にあった多様な職業的専門性を獲得できるような内容とし、なかでも教職を目指す学生のための教職課程の教育と教職への支援体制を充実させてきた。

発足当初の教職課程は諸事情から、理科や数学の中等教育ではなく、理科や科学に強い小学校教員を養成するというスタンスの小学校教職課程と特別支援学校教職課程であった。学科教育のキーワードとして、教育現場で求められる3つの力「子ども理解」「コンピュータ」「理科教育」を掲げて、アクティブな小学校教諭や特別支援学校教諭を養成することに力を入れた。

中部大学の他学部ではすでに全学教職課程が設置されており、6学部で15科目の高等学校教員免許、3科目の中学校教員免許の取得を可能としていた。しかし、それらの学部教育は中等教育を教育目標としているわけではなかった。一方、現代教育学部は現代社会に即応した教育学の知見に学ぶことを中心的課題とした。その1学科である現代教育学科の教職課程は、全学教職課程の仕組みや経験知に学びながら、初等教育（後に中等教育の一部を追加）という新たな領域の教員養成へと歩を進めることになった。

2012年度からは、学校教育の現場で求められる力を今日的状況に合わせて学科教育のキーワードを改変、進化させ、「科学的思考力」「ことばの力」「課題探求力」の3つとした。また同年度からは念願の中学校理科の教職課程も認可され、理科教師を目指す学生たちが入学してきた。現在では、小学校教員免許に加えて中学校理科の免許を取得するには、教職科目を59単位も履修しなければならないにもかかわらず、理科教育の3つのゼミ希望者は定員オーバーの状況である。また各設備も充実してきており、第二理科室も増設された。

2017年度には現代教育学科に2つの専攻（現代教

育専攻・中等教育国語数学専攻）が立てられ、学科名が変更された。現代教育専攻は児童教育学科の教育課程と教職課程を引き継ぎ、中等教育国語数学専攻では中学校の国語と数学の免許が取得できるようになった。学科の入学定員は据え置かれたままであるので、学生にとっては選択肢の多い充実した教師教育の環境が整ったことになる。学科設置から10年目の節目にふさわしい新体制に生まれ変わったといえる。

この10年間を振り返ると変化したことと一貫して続けられていることがある。一貫して続けられていることは、学生たちが、現場で求められるアクティブな教師像に近づけるように実践的体験的な授業が数多く展開され、授業外では教育職に資するような諸活動が用意され、その参加が推奨されてきたことである。諸活動とはたとえば、3年生以降は教職志望コースと一般職志望コースに分けてコースごとに適切な指導を行い、これをゼミ指導と連動させてきたことが挙げられる。また、3年生、4年生対象の教員採用試験対策講座や教育実習センターの専門教員による面接指導、教育現場におけるプレ実習等の他、学科がサポートする課外活動としての学習支援活動、教育現場でのボランティア活動などがそれに当たる。

このような発想および活動推進の背景としては、創設当時に大学が設置した「21世紀型教育者養成に関するアドバイザー会議」にて、学外の学識経験者から現代教育学部の教師教育に対して助言を頂く機会を得たこと、K市など近隣の教育委員会や学校等の理解と協力が得られたことが挙げられる。また学科教員がそれぞれの専門分野のモチ味を生かしつつ、学生の人間力や教科実践力の養成のためにきめ細かく指導するという協力体制を持続してきたことも見逃せない。学科教員の3割以上が、小中学校の教員や管理職等の経験者であることも、教師教育の強力なエンジンとなっている。

一方この10年間で変化したのは、既述したように教職課程の再編による取得可能な免許数の増加、それに伴う教育課程の編成替えである。これにより、多くの学生に小学校と中学校という2つの教員免許を取得する道が開かれた。一方、大学の方針で全体としてのカリキュラムのスリム化が方向づけられ、履修

可能な科目数や学びのバリエーションが少なくなった。これは教員免許取得を目指す学生にはデメリットはほとんどないが、一般企業を目指す学生には多様な学びの機会が狭まることになった。学科教育の力点を実践的な教育力をもつ教員養成へと明確にシフトしてきた結果ということもできる変化である。

2012年4月には、現代教育学科卒業生7名が初めて小学校の正規教員として、教壇に立つという節目を迎えることができた。以後6年間、表1に示すようにその数は少しずつ増加している。このような変化は現代教育学科の1つの実績となって、後に続く在学生や指導にあたる教員たちを鼓舞し、さらなる良き循環を今後も醸成していくと思われる。

3. 教員免許取得者数と就職者数の推移

表1は、現代教育学科を2011年度に卒業した1期生から2016年度卒の6期生までの教員免許状取得者数と教職に就いた人数の推移を示している。各年度末時点での集計であるのでその後の増減などは含まれていない。ちなみに幼児教育学科の結果の一部も併記した。

教員免許取得者数の傾向を見ると、各年度の小学校教員免許取得数は60人前後で大きな変化は見られないが、取得率では、2013年度卒業生から現在まで約59%～約69%で推移している。表中の小学校教員免許取得者とは、取得希望者のうち教育実習参加条件を満たしたうえで所定の単位を履修した学生であるため、その数は年度によって変動がある。中学校国語、社会、英語の免許取得は人文学部の教職課程へのブリッジ制度によって可能となった仕組みであるため、人数や成績上の制約から少人数となっている。中学校理科の教員免許は2015年度卒の学生から取得が可能となり、およそ毎年20人前後が一定の条件をクリアして履修し、免許取得に至っている。特別支援学校の教員免許取得者も各年度とも20人前後であるが、これは教育実習受け入れ人数の制限などが反映されるためである。以上のように現代教育学科の教職課程では、学生の希望と種々の制約を勘案しながら履修指導、学修支援を行った結果、表1のような教員免許取得者数の推移になっている。

なお表1からは読み取れないが、実態としては教

員免許取得者のほぼ全員が小学校教員免許を取得している。そして小学校教員免許取得者の3割強が中学校教員免許の一科目も併せて取得し、同じく3割程度が特別支援学校の免許を取得する。そして小学校教員免許のみを取得した学生が3割前後となっている。蛇足だが、小学校免許のみという学生からは、1免許取得に専念できる、あるいは時間的余裕をボランティアに当てられるなどの声を聞くことが多い。1免許取得という実態は、当事者にとっては必ずしも否定的な状況ではないと思われる。

表1下段の就職者数を見ると、1期生の正規教員採用数は7名、臨時講師等の採用数は22名である。その後正規採用数と臨時講師採用数は少しずつ増え続けている。直近の2016年度卒の6期生は正規採用が18名、臨時講師はやや減少して17名、そして正規採用となった既卒生は11名である。これまで中学校国語で1名、理科で1名が正規採用になっている。

以来今日までの正規教員採用の総数は、小学校教員で新卒と既卒を合わせて計114名、中学校国語1名、理科1名、特別支援学校では新卒と既卒で計18名、6年間の総数は134名である。表記していないが、地域別では愛知県、名古屋市が多く、岐阜県、神奈川県等も例年2から5人程度は合格している。また1名だけの県も、近畿や関東地方に点在している。ちなみに臨時講師等の総数は170名である。

これまでの正規教員採用総数を卒業生総数や免許取得者総数と比較すると以下の傾向がわかる。現代教育学科の6年間の卒業生総数は531名であるので25.2%が正規採用となっている。また教員免許取得者総数における正規採用率は、小学校教員免許で31.7%、特別支援学校免許で14.9%、中学校免許では各教科とも5%以下となっている。臨時講師を含めると、全卒業生のうち教員に採用された総数は284名、53.4%である。この割合は全卒業生の小学校免許取得率（67.8%）に近い数字である。実際、小学校免許取得者総数の78.9%が教員（正規+臨時284名）になっており、小学校教員免許取得者はかなりの割合で教員になったといえる。しかしそのうち半数以上が臨時採用という現実がある。

このような傾向は、現代教育学科では教員免許を取得すれば約8割が教員になることができることを示す。ただし、採用形態、学校種なども含めて希望

表1 現代教育学部教職課程における教員免許取得者数と就職者数

2017/6/22 現代教育学部事務室調べ（表記を一部改変）

		2011 年度卒	2012 年度卒	2013 年度卒	2014 年度卒	2015 年度卒	2016 年度卒	合計
教員免許 取得者数	小学校免許	59	65	55	67	62	52	360
	中学校免許(国語)	3	3	5	5	2	5	23
	中学校免許(社会)	2	3	3	4	1		13
	中学校免許(英語)	2	2	1				5
	中学校免許(理科)					23	20	43
	特別支援学校	19	20	18	25	26	13	121
	幼稚園教諭	43	59	56	66	67	70	361
就職者数	小学校	7(22)	9(35) + 2	10(24) + 8	10(34) + 12	16(38) + 11	18(17) + 11	70(170) + 44
	中学校(国語)						+ 1	+ 1
	中学校(社会)							
	中学校(英語)							
	中学校(理科)						1	1
	特別支援学校		2	3 + 1	2 + 2	4 + 1	2 + 1	13 + 5
	幼稚園	12	17	12	23	19	16	99
現代教育学科卒業生数		69	84	94	98	95	91	531

備考1) 数字は各年度の卒業時点のもの

備考2) 網掛け欄は現代教育学科以外

備考3) 表中()は臨時講師等、+ 数字は既卒者の合格数を示す

* 中学校理科は2015年度卒より取得可

** 大学院教育学研究科修了者の専修免許取得者数

が叶うかどうかは状況次第である。とくに、社会の状況の変化と教員採用枠数、臨時採用数、臨時講師の役割などは密接に関連しており、今後状況把握による適切な対応が必要となろう。

4. 卒業生から見た現代教育学科の教育

教員として活躍している卒業生のうち、携帯電話の某アプリケーションで連絡のできる104名の卒業生に対して、「児童教育学科で受けた教育について」という8問からなるWebアンケート調査を2017年5月末に実施した。実施に当たっては倫理的配慮に言及し、自由回答であり、回答内容を目的以外に使用しないことなどを明記した。3週間の間に約3割の対象者から回答があった。ここでは全問に回答があった15名の回答を資料として、卒業生から見た学科の教育の意義と課題を考察したい。質問では卒

業生が在籍したときの学科名称である児童教育学科ということばを使用している。

質問項目は、氏名、経験年数、担当した学年、担当した校務分掌の4項目のほか、以下の4項目（(1)～(4)）であった。回答数が少ないため、(1)～(4)の回答文をキーワードに分けて整理しまとめた。

(1) 質問：「大学で受けた授業やゼミの経験が現在の仕事に役立っていると感じるときはどんなときか」

15名中11名が、指導案作成や教材研究の授業、模擬授業の検討、設備を活用した実践的な授業、教育実習などが役立ったと回答した。それらの授業が、具体的に小学校での授業で何を押さえるべきか、授業の時間配分、子どもに配布するプリントの工夫などに活かすことができている等の具体例を挙げた回答が複数あった。学科教員名を挙げてその教えを教訓にしているという回答も複数あった。

(2) 質問：「大学の授業以外で現在の仕事に役立っていると感じるときはどんなときか」

10名が、学校や教育に関する諸団体でのボランティア活動が役立ったと回答した。他に、大学での部活やアルバイト、飲み会などが挙げられた。ある回答者は、これまでの経験すべてが大切である回答した。

(3) 「児童教育学科の教育のなかで残念だったこと、改善してほしいこと」

8名が、もっと実践に役立つ授業の時間がほしかったと回答した。具体的には、指導案の書き方、授業研究、学級経営の方法、係活動の指導方法などが挙げられており、講義・座学は減らしても良い、との意見もあった。他に、2名が中学校の免許がとれるようにしてほしいと回答した。改善要望なしは5名であった。

(4) 「現在、どのような教師を目指しているか？
そのために工夫していることは？」

15名とも、なりたい教師像を詳しく述べている。なかでも子どもや同僚から信頼される教師、子どもの可能性を伸ばす教師、わかりやすい授業ができ、よりよい学級を築ける教師、他者と積極的にコミュニケーションができる教師、などの回答が多かった。また、工夫していることとして、自ら学ぶことを挙げる回答が多かった。具体的には、校内外の研修を大切にする、研究会に入り勉強している、学び続ける姿勢をもつ、他の教員から学びとる、などが挙げられた。

以上の回答から、卒業生が現代教育学科での教育をどうとらえているかを垣間見ることができる。第一に、卒業生は、現場で求められる実践的体験的な授業を学科が数多く展開してきたことを大いに評価しており、それを活かしながら日々の教育活動を送っていることである。また、学科で推奨してきた教育に関する課外のボランティア活動の経験が、現場で役立つと捉えている。一方、改善してほしいこととして、もっと実践に役立つ具体的な方法を大学で取り上げてほしいとの声が多かった。これは、現場に出てみると大学での実践的体験的授業だけでは不十分であり、大学では直接的には学び得なかったさまざまな現実的課題に、日々直面している証しとも考えられる。

では、学科の教育課程のなかで、どこまで現場で

即時的に役立つ授業を提供するべきなのだろうか。現代教育学科では教育現場で求められるアクティブな教師の養成を標榜し、また実践されてきたが、そこにはおのずと限界がある。むしろ学生には、その限界をどう切り開き、課題をどう解決するのかを追求する手がかりを、自ら見いだしてもらいたいというのが学科教員側の思いではないか。大学は、創造的な職業人生の基礎固めとしての豊かな知性を磨くところでもあることを、講義の中で確実に伝えることの難しさに改めて気づかされる。

最後の「現在どのような教師を目指し、工夫しているか」という質問については、模範的、理想的な回答が多く寄せられている。学び続けることでより良い教師を目指す姿勢は、これまで多くの学科教員が講義等で折に触れて示唆してきたことである。卒業生の回答からは、彼らが教育現場で真摯に子どもに向き合いながら、さらに高い理想に向けて自己研鑽に励む姿が浮かび上がっている。

5. 教育課程外の体験的活動の意義

中央教育審議会では、2015年12月総会において「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）」を取りまとめ、大学の教職課程における教員養成を含め、採用、研修を一体的に捉えた資質向上の方策を提言している（文部科学省、2015）。その中で「教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させることが必要」と述べ、これまでの答申内容（たとえば2006年）がさらに強調されている。現代教育学部の2学科では発足当時から教育課程外の教育的な体験活動をも重視して、学部教員の主導でこの考え方を具体化してきた（花井ほか、2010）。ここでは現代教育学科の教員が関わっている2つの活動を取り上げその意義について考える。

「子どもアカデミー」活動は、教員志望学生の教育的人間力育成を目指した子どもへの学習支援活動である（中部大学現代教育学部児童教育学科、2015、2016）。有志の学生を対象に2013年度から試行的に始まり、本年度で5年目を迎える。当初は大学内に近隣の小学生を招き、学生が企画した学習プ

ログラムに取り組んでもらい、学生はファシリテーターとして交流するという試みであった。参加した学生に対する事前事後調査では、本活動が「効果的な授業方法の学びと探求」「教材研究・知識の向上」などに役立つと期待しており、実際の子どもへの学習支援活動をととしてそれらが教師の資質として重要であることを実感した、と述べている。

2015年度からは、K市教育委員会主催の土曜教室の運営に「子どもアカデミー」が参画することになった。これは、児童に「楽しくてちょっと学べる土曜日学習」を提供するもので、その企画運営を任されることは児童と交流する絶好の機会であった。具体的には、高学年児童に対しての学習支援プログラム、たとえば「葉脈標本でオリジナル作品を作ろう」などの教科内容の発展的学習を学生がチームで企画し、土曜日に小学校に出向いて学習活動の支援を行う。2015年度は土曜日午前中に21回実施。延べ235名の学生が延べ552名の児童と交流している。これらの活動はチーム活動や地域貢献の側面もあり、学生にとってはまさしく教育的人間力の学びの場となっている。その後も改善等を加えて継続中である。味岡ほか（2017）によると、事後調査において学生は、企画力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力などが身についたと振り返っている。

「中部教育実践研究会」は、授業研究に長いキャリアをもつ現代教育学科教員が立ち上げた授業研究会である（現代教育学研究所年次報告会2016年度資料）。この会の主なねらいは、子どもが主体となる授業づくりと学級づくりについて具体的な授業検討を通して学び合い、互いに実践力を高めることである。対象は若手の現職教員と教師を目指す学生である。

2012年度から毎年10回程度行われ、各回とも現職教員、大学教員、本学学生など10名から25名が参加している。報告（橋本、2017）によると最近では学科卒業生が現職教員として授業紹介をすることも増えてきた。

2017年6月24日の回では、本学学生6名を含む14名が参加して実施された。前半で4年生国語「動いて、考え、また動く」（高野進、光村図書）の教材解釈と発問について検討し、後半ではベテラン教師により提案された授業のDVD視聴と意見交換が

あった。参加した1年生のある男子学生によると「発言を求められると頭の中が真っ白になる。緊張する。でもとても面白い」という。また大学教員による解説やミニ講義もあり、学生にとっては、現場に出る前から授業方法と学級づくりについて直接具体的に考えを深めるという貴重な機会になっている。

他にも、特別支援学校でのボランティア活動（松本・鈴木、2013）が夏休みに実施され、学生たちは教育実習とは別に特別支援学校の児童生徒と交流した。

現代教育学科が学生たちに推奨しているこのような模擬教育体験や研究会は、それぞれの報告書が指摘するように、学生の意欲や実践力を高める貴重な機会となっている。これらは大学の中での学びを補完し、その成果を相乗的に高めるという意義があり、現代教育学科にとって不可欠な活動を言えるだろう。

6. まとめにかえて

現代教育学科の10年を個人的視点から振り返ると、教師教育についての様々な取り組みがようやく実を結びつつあるように感じられる。学科創設以来、卒業生の教員の正規採用者数は少しずつ増え続けており、教員免許取得者の約8割が正規および臨時の教員として採用されていることから、教員養成系の学科として一定の評価ができるだろう。今後も成果をあげ、さらに発展するには何が必要だろうか。

今、社会情勢は不透明で、社会不安や貧困問題が子どもの生活圏に関わるようになった。その影響下で少子化も進み、教育に関する諸問題は山積するばかりである。中央教育審議会答申（文部科学省、前出）に見るように小中学校の教員に求められる資質も多様化している。速いスピードで変化し続ける教育現場に適応し、貢献できる教員を養成していくには、現代教育学科にもあらたな工夫が求められる。これまでの議論を踏まえて今の課題を考えてみる。

第一には、これまでの教職志望学生への指導体制や課外活動を、対外的な変化に即応させつつも原点に沿って地道に推進していくことではないだろうか。

今一つには、大学教育の古くて新しい柱である幅広い教養、豊かな知性や思考力を磨くことが、変化し続ける教育現場での教師のふるまいや長い教師生活を支え、教師の活動を進化させていくことを、改

めて確実に学生諸君に認識してもらうことではないか。先のアンケートの回答に示されたように、座学よりも即戦的な実践力養成に注目しがちな昨今の学生にとっては、幅広い教養などの普遍的な学識が実践の基礎であるという自覚は乏しいように見受けられる。本学科の掲げる実践力養成とは、「教養や学識」を大前提としてこそその実践力である。特に教職教養分野を専門にする筆者としては、その座学たる学問の意義と現実との関連性を、学生にどう伝えるかを工夫していくべきであることを痛感する。さらなる個人的な思いとしては、卒業生の求める「現場で役立つ」学問ということばに矛盾を感じている。大学での一見迂遠な学びを受け止め、深め、新しい自分に生まれ変わるといった経験も大切にしてもらいたいものである。

他の現実的課題として、毎年増加していく卒業生に対するリカレント教育の確固たる体制構築も挙げられる。卒業生同士の相互交流と長い職業人生を通じての共同学習のような仕組みによって、現役生と同窓生がともに磨きあって中部大学卒業生らしい専門的職業人として向上していく、そして現代教育学部が社会的な地歩を着実に固めていく、という未来を期待したい。また本学には先に述べたように全学教職課程という組織があり、中学校、高等学校の教員免許取得者数、教職就職者数は累積してきている(付表)。これまで10名以上の卒業生が中学校・高等学校に正規教員として採用されており、現代教育学部が今後、全学教職課程となんらかの連携を図ることも双方にとって意義があろう。

2021年4月からは中等教育国語数学専攻の卒業生も社会に出る予定であり、現代教育学部の掲げる、特色のある教員養成の成果が色濃く表われる時期となるだろう。そのころの社会状況、教育を取り巻く環境はどのようなものであろうか。われわれが期待したいのは、教育政策によって、少人数教育、特別支援教育の充実・拡大、専科教育の拡大、あるいは特色ある教科教育などによる小中学校の教員数の増大、採用数の増大というような積極的な変化がもたらされ、現代教育学部がますます存在価値を高めるという状況であり、その実現を切に願うものである。

最後になるが、現代教育学部では「次世代教育」を学び、教師以外の進路を選んで社会人となった卒

業生も多い。彼らは自ら努力し、またゼミ指導をはじめ学内の種々の支援を得て、行政、警察などの公務員、福祉関係、金融、流通などの職種で幅広く活躍しており、彼らの存在もまた現代教育学部の10年の歩みと成長を支えてきたことを申し添えておきたい。

謝辞

本稿は筆者の個人的視点から、中部大学現代教育学部の先生方の教育活動を参照しつつ、また折に触れて交わした先生方との議論などを想起しながら執筆いたしました。先生方からこれまでに頂いたご示唆に厚くお礼申し上げます。

また、アンケートに回答して下さった卒業生の皆さん、資料を提供して下さいった現代教育学部の橋本美彦先生、現代教育学部事務室高木宏明さん、教職支援センター川原渉さん、他、多くの方のご協力を得ました。記して皆さまに深く感謝申し上げます。

引用文献

- 味岡ゆい ほか 2017 大学生の「教育的人間力」の育成を目指して ―子どもアカデミーの歩みと課題― 中部大学現代教育学研究紀要 Vol. 10, Pp. 49-54.
- 中部大学現代教育学部児童教育学科 2015 2015年度「子どもアカデミー」活動報告書
- 中部大学現代教育学部児童教育学科 2016 2016年度「子どもアカデミー」活動報告書
- 橋本美彦 2017 民主的な学級づくりの実践 ―中部教育実践研究会の事例を通して― 中部大学現代教育学研究紀要 Vol. 3, Pp. 55-62.
- 花井忠征 ほか 2010 地域と連携した実践的指導力を育成する教員養成プログラムの開発 ―フレンドシップ鯉道の教育環境整備と中間評価― 中部大学現代教育学研究紀要 Vol. 3, Pp. 63-71.
- 松本和久・鈴木郁子 2013 実践力を高める特別支援学校教員養成 ―特別支援学校の児童を対象とした「サマースクール」の活動を通して― 中部大学現代教育学研究紀要 Vol. 6, Pp. 37-44.
- 文部科学省、2015 中央教育審議会答申 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm (2017年7月1日アクセス)

付表 中部大学教職課程における教員免許取得者数と就職者数

2017/6/16 教職支援センター調べ

			2011 年度卒	2012 年度卒	2013 年度卒	2014 年度卒	2015 年度卒	2016 年度卒	合計
教員免許 取得者数	人文学部 学科	中学校（国語）	4	7	6	6	8	7	38
		中学校（社会）	7	9	9	15	11	10	61
		中学校（英語）	1	6	1	1	4	1	14
		高等学校（国語）	9	9	10	6	8	9	51
		高等学校（地理歴史）	7	9	9	15	11	12	63
		高等学校（公民）	3	2	2	1	2	1	11
		高等学校（英語）	2	6	3	5	5	2	23
	国際関係 学部	(専)高等学校(英語)	1						1
		高等学校（公民）				1	2		3
		高等学校(地理歴史)		1		3	6		10
		高等学校（中国語）		1					1
	経営情報 学部	高等学校（商業）	1	2	3		1	3	10
		高等学校（情報）		2	1		1	2	6
	応用生物 学部	(専)高等学校(理科)		1		1		3	5
		(専)高等学校(農業)					1		1
		高等学校（理科）	3	13	10	15	25	21	87
		高等学校（農業）	4	6	4	6	8	7	35
		栄養教諭				4	5		9
	工学部	(専)高等学校(工業)			5	1			6
		(専)高等学校(理科)	1		1		1		3
		高等学校（工業）	26	29	24	7	16	23	125
		高等学校（情報）	1		2	1	1	3	8
		高等学校（理科）	4	4	6	6	11	12	43
	生命健康 学部	高等学校（保健）							0
		養護教諭	9	6	5	7	7	7	41
教職 就職者数	人文学部 学科	中学校（国語）	(1)	正 1 (3)	(1)	正 1 (2)	(2)	(3)	
		中学校（社会）	(1)	(2)	(2)	(3)	(5)	(3)	
		中学校（英語）	なし	(5)	なし	(1)	(1)	なし	
		高等学校（国語）	(2)	(6)	(5)	(1)	なし	(1)	
		高等学校(地理歴史)	なし	(1)	なし	(1)	(3)	(1)	
		高等学校（英語）	なし	なし	(1)	(1)	なし	(1)	
	国際関係 学部	高等学校（公民）	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
		高等学校(地理歴史)	(1)	なし	なし	(1)	なし	なし	
	経営情報学部	高等学校（商業）	なし	なし	(1)	なし	なし	(2)	
	応用生物 学部	(専)高等学校(理科)	なし	正 1	なし	(1)	なし	なし	
		高等学校（理科）	(1)	(4)	正 1 (2)	正 1 (1)	正 1 (3)	正 2 (1)	
		高等学校（農業）	正 1 (3)	(1)	(1)	正 1 (1)	なし	なし	
		栄養教諭	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
	工学部	(専)高等学校(理科)	(2)	なし	なし	なし	なし	なし	
		高等学校（工業）	正 1 (4)	正 1 (1)	(1)	(1)	正 2 (1)	正 1 (1)	
		高等学校（情報）	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
		高等学校（理科）	(2)	(1)	(2)	(1)	正 1 (2)	正 1 (2)	
	生命健康 学部	高等学校（保健）	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
		養護教諭	(4)	正 1 (2)	なし	正 1	なし	なし	

備考) 正 1 は正規採用 1 名、(1) は講師など 1 名を示す。

*2016 年入学生（平成 28 年）より経営総合学科として（商業）のみ。それ以前は、経営情報学科（情報）、経営学科（商業）、経営会計学科（商業）であった。

受付日 2017 年 9 月 29 日

受理日 2017 年 11 月 9 日

Abstract

The Department of Contemporary Education was established with the aim of nurturing human resources equipped with intelligence and practical power about “Next Generation Education” widely, celebrating the milestone of 10 years. It is in the field of school education and teacher education that the Department of Contemporary Education has particularly focused on. The transition of the educational goal of the department, the teaching system, the number of teacher license acquirers, the result of questionnaire survey of graduates, and the significance of extracurricular activities, are analyzed. The results showed that certain achievements such as an increase in the number of employment for teachers, were observed.

Future tasks are to promote the guidance system and extracurricular activities to the teacher aspiring student so far in line with the external change while responding promptly to the external change, and to make students recognize again the importance of honing rich intelligence and thinking skills wide range of cultural knowledge which is an old and new pillar of university education.

Keywords: Practical Power, Teacher Education, Teaching Position, Extracurricular activities, Extensive Culture